

横浜市小学校社会科研究会

3学年部会

研修会記録

第 8 号

令和6年 3月 6日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 権正 倫範

【提案日時】

2月 14日 (水)

提案 権正 倫範 先生 (牛久保小)

【会 場】

横浜市立平沼小学校

司会 板山 涼 先生 (中尾小)

記録 北沢 宏 先生 (間門小)

1 提案内容

3年部会 研究のまとめ

2 提案者より

研究の視点①

「一人ひとりが問いをもてるような社会的事象との出会いと問いを生かした単元づくり」について

○生活経験や既習内容の問い直し

生活経験や既習の経験を問い直すことができるような資料提示や体験活動を取り入れることが大切。

子どもが自分の認識と事実とのずれに気付けるような資料や体験活動を単元に取り組みことでより多くの子どもが問いを見出すことができた。

○魅力ある人と、その営みに直接触れることの出会い

実際に人の営みに触れたり、その話を伺ったりすることで子ども達の「知りたい、考えたい。」という追究意欲につながった。その考えをみとり、単元をデザインすることで個の問いを生かして単元をつくることが大切。

○社会的事象との出会いを具体的で分かりやすくする

特定の人を取り上げたり、すでに一定の理解のある既習内容を問い直したりすることで、誰もが問いをもてるような単元を見通す学習問題が成立した。

研究の視点②

「子どもの思考に沿って協働的に学びを深めるための手立てを大切にせる授業づくり」について

○みとりを生かした板書や問い返し

子どもの考えの視点を明確にし、比較できるように板書を構造的にすることで自分の考えと友達の考えを関連付けて学びを深めていた。また、前時までのみとりをもとに、本時での考えの変容や深まりをみとり適宜問い返しをすることで新たな問いを生み出すことができた。

○比較したり、関連付けたりできるようにするための資料提示

子どもが考えを出し合い、話し合いが深まったタイミングで新たな資料を提示することで、子どもだけでは考えられなかった視点に新たに気付いたり、社会的事象の意味について考えを深めたりすることができた。

子どもが事象を具体的にイメージしやすくするために、子どもが資料を操作しながら考えるような資料を提示した。そうすることでより多くの子どもが共通理解することができ、思考が大きく動い

た。さらに子どもの必要感が生まれたタイミングでさらなる資料を提示したことで学びを深めることができた。

3 参加者より

○同じ土台で話し合いを進め一人ひとりが問いをもつために

生活経験の違いを埋めて全員が教材について共通理解した上で学習すると一人ひとりが問いをもつて取り組むことができると感じた。そのためにも導入の前から教師が子ども達を見取る必要がある。そして、体験活動を取り入れるなど十分に時間を確保する必要もあると思った。

○子ども達の問いを生かした単元を見通す学習問題を立てるために

教材との出会いで多くの子どもが問いをもてるようにしたい。そのためには、材を子どもがイメージしやすい具体的である必要があると思った。

<講師の先生より>

平戸小学校 若色 昌孝 校長先生

○視点①について

本時の中でも問いをもち、次時につながるような授業も「問いや見通しをもつ」とも言える。問いとは何か、見通しとは何か、さらには主体的に学ぶ姿とはどんな姿なのか、それらを引き出す授業を今後も考えていきたい。また、「協働的に学ぶ」ということも教師が具体的に子どもの姿をイメージし、授業を計画する必要がある。

○研究を重ねることについて

「生活科がなかったころの1、2年生ではどんな社会科を学習していたのか」「生活科ができてからの生活科と社会科との違いやつながりは何か」「過去にあった4年生の消防の学習と現在の3年生の消防の学習の違いは何か」など何がどのような経緯で変わり、何が違うのかを理解していると単元の作り方や、教師の意図する視点が変わったり、定まったりすることもある。

○現在の社会的事象を教材に

今、起きていることを教材にすることも大切。今を生きる子どもが今、起きている事象について考えるとより教材が身近になる。「能登地震」や「北陸」を材に授業をした教師はどれくらいいるだろうか。

下野庭小学校 黒木 英晴 校長先生

○身近な教材で学習する

能登地震、羽田航空機事故など今年の正月はまさかの連続だった。様々な事象が日常で起きているのでそれらを教材化することは大切。しかしながら全ての単元で教材開発するのは難しいため、区や市で情報を共有していきたい。

○これからの社会科学習について

世の中は常に変化、発展している。子ども達が生きる「今」を学習していくことも大切である。例えば、ロボットやAIが発達し、人々の職業が変化していることや、自動車のEV化など。世の中の「今」を取り扱うことで子ども達の意欲も高まる。

また、ICT機器を活用した学習も今後研究を深めていきたい。一人1台のタブレットを有効的に活用し、授業に取り入れていけるようにしたい。

文責 北沢 宏 (間門小学校)